

【平成 24 年度】

# ～「水が織りなす安曇野今昔物語」講座～

～第 5 回～

## 人物編「昭和の時代」



特攻隊員・上原良司が最後の別れをした「さようなら」の乳房橋

とき：平成 24 年 9 月 4 日（火）午後 7 時から

場所：穂高交流学習センター「みらい」

講師：中島 博昭 氏

「水が織りなす安曇野今昔物語」講座 人物編 , 12.9.4

★昭和の時代

前	太平洋戦争 16 - 20	敗戦	後
恐慌から自由主義→軍部・全体主義体制		国民主権憲法	地球危機
	山田「蟻の仁義」	上原「所感」 白井「展望」 花村・濱原大臣 藤原「自由主義の再検討」	

山田多賀市 (1907-1990 堀金) 極貧の小作人の長男

- 業績 ①農民文学の発展に貢献 小説「生活の仁義」は芥川賞候補となる（18年）  
 ②戦争に反対し、戦時中から平成2年死ぬまで無戸籍を貫いた。
- 内容 ①子守奉公、大工、瓦職人と生活・住所を転々と変え、甲府に住み着いてから  
 その体験を生かし、従来の文壇にはみられぬ庶民の立場に立った貴重な作品  
 を発表した。  
 ②「生活の仁義」発表が当局の弾圧を強め、戦場での死が立ちはだかるのに、  
 自ら体験し信念となった「一宿一飯の仁義」を以て自分の死亡届を出し、國  
 や行政から離れて自分と家族を守ろうとした。死んだ時「三度死んだ男」と  
 話題になった。

上原良司 (1924-45.5.11 池田町生まれ有明で育つ) 特攻隊員

- 業績 出撃前夜書いた「所感」により、敗戦後の国民に自由な国家を再建するようメ  
 ヌセイを出し、多くの人々の心に強い影響を与えている。
- 内容 三つの遺書を残したが、学徒動員の18年に書かれた第一のものから最後の  
 「所感」までのわずか2年間、独りで思索し体系的な国家観・死生観をまとめ  
 どんな時代でも通用する原理を国民に示した透徹した知性と不屈の勇気が感動  
 を呼んでいる。

天皇・国家のために命を捨てるのが名誉→自殺死・天国で恋人と再会する過  
 程が死 自由は人間の本性、圧迫されればかえって強く現われる。

国民一人ひとりの力で自由な国家の建設を（民主主義の原理）

- 文化財 池田町良司顕彰碑、有明の上原家・乳房橋（最後の別れの「さようなら」）  
 松本市和田の万年寺の墓

白井吉見 (1905-1987 堀金) 素封家の生まれ 文芸評論家

- 業績 ①筑摩書房の創設（15年）、戦後の出発「展望」編集長（21年）

②普遍的価値（ほんもの、確かなものの示す） 太宰治賞 宮尾登美子 吉村昭など多くの優秀作家を世に出す。

③『安曇野』を出版（39～48年）、「安曇野」の名前を普及させるきっかけをつくる。

内容 ③郷土の先人たち（相馬愛蔵・黒光たち）の人生を戦前から戦後へと追い、戦争で三百万人もの犠牲を払わなくてよかったです、自前の民主主義の社会建設の筋道があつたことを実証する、郷土愛と祖国愛に裏付けられたメッセージ。

自らの敗戦体験をバネに日本の近代のあり方を問うた、「生と死のはざま」で書かれた作品。

↑

小学校時代校長佐藤嘉市から学んだ「精神の世界としての常念岳」

墓の「滾々滔々（こんこんいついつ）」の自筆語句。

水汲きぬ 滾れるさま

濤きぬるさま

花村四郎（1891－1963 豊科光） 父、旧上川手村村長 弁護士 政治家

業績 ①昭和初期 在野司法の重鎮

②鳩山一郎に認められ、戦後自由党創立に参加、29年から鳩山内閣の法務大臣

内容 ①万朝報の主筆。大正時代から小作争議の弁護活動に尽力。

②昭和17年の翼賛選挙以来衆議院議員当選8回18年努める。東京が選挙区。

藤原保信（1935－94 豊科田沢） 祖父・父と土建屋。父戦死。早稲田大学教授

業績 今までの資本主義や社会主義の道でなく、第三の「コミュニタリアニズム」（共同体論）の道を主張し、現代世界の危機を克服する方策として注目をあびて いる。

内容 南安曇農業高校を卒業し上京、日東紡の現業労働者として工場で働きながら、早稲田大学第二政経学部で学ぶ。母校の教授となってから、その高邁な学識と学生への深い愛情から「藤原シューレ」といわれる弟子たちが生まれ、現在、文壇や論壇を席巻する活躍をしている。

その一人、姜尚中（カンサンジュン）東大教授は恩師・藤原を「苦学されたのにその片鱗を見せない柔軟な人柄、先を見通す眼力の持ち主」と云い、未来社会に三つの提言をしているのに尊敬している。それは、①環境哲学。大量生産・大量消費の人間生活には限界がある。自然の生態系を守り、環境適合型の社会をデザインすべき。②自由な経済活動のもとで、人間の欲望が肥大化するにまかされている政治のあり方そのものを変えるべき。③常に強者が弱者をしのいで富を独占するという現実社会のありように対しての批判。